

星と柱を数えたら

小川未明

青空文庫

あるところに、広い圃^{ひろはたけ}と、林^{はやし}と、花園^{はなぞの}と、それにたくさんな宝^{たからもの}物^{もの}を持っている人^{ひと}が住^すんでいました。この人^{ひと}は、もうだいぶの年寄^{としよ}りでありましたから、それらのものを、ふたり^{ふたり} 息子^{むすこ}たちに分^わけてやって、自分^{じぶん}は隠^{いんきよ}居^よをしたいと思^{おも}いました。

けれど、兄^{あに}のほうも、弟^{おとうと}のほうも、そろって怠^{なま}け者^{もの}でありました。兄^{あに}のほうは、一日^{いちじ}仕事^{しごと}もせずに、ぶらぶらと家^{いえ}の中^{なか}で遊^{あそ}んでいました。そして、圃^{はたけ}へ出^でて働^{はたら}いたり、外^{そと}を歩^{ある}いたりすることが大^{だい}きらいでありました。

弟^{おとうと}のほうは、兄^{あに}とちがつて、すこしも家^{うち}におちついて勉^{べんきよう}強^{ちやう}をするということがなかつたのです。一日^{いちにち}、外^{そと}を遊^{あそ}びまわつて、日^ひが暮^くれると家^{いえ}を思^{おも}い出^だして帰^{かえ}ってくるというふうでありました。しかし、圃^{はたけ}へ出^でて働^{はたら}くということは、兄^{あに}と同じように大^{だい}きらいでありました。

ふたり^{ふたり} 息子^{むすこ}たちが、こんなふうに怠^{なま}け者^{もの}でありましたから、父^{ちち}親^{おや}はほんとうに困^{こま}つてしまいました。行^ゆく末^{すえ}のことなどが案^{あん}じられて、どうかして、いい子供^{こども}になつてくれぬものかと、そればかり心^{こころ}に念^{ねん}じていました。

いくら、二人^{ふたり}に向^むかつて、「仕事^{しごと}をせよ。」といったり、また、「働^{はたら}けよ。」といつて

も、ぬかに釘くぎでありました。

そのうちに、父親ちちおやは、だんだん年としをとって、ますます二人ふたりのことを考えると気きになつてならなかつたのです。ある日ひのこと、ふと、父親ちちおやは、なにか考えかんがると、二人ふたりを自分じぶんの前まえに呼びました。兄あにと弟おとうとは、なにごとだろうと思おもつて、父親ちちおやの前まえにすわつて、顔かおをながめました。

「私わたしは、もうだいぶ年としを老とつた。早く財産ざいさんをおまえがたに分わけてやつて、隠居いんきよをした

と思う。けれど、そのかわりおまえがたは、私わたしのいいつたことをしなければなら

。」と、父親ちちおやはいいました。

「お父さんとう、私わたしたちのできることなら、なんでもいたします。むずかしいことでなければ

。」と、兄あにと弟おとうとはいいました。

父親ちちおやは、兄あにに向むかつて、

「おまえは、外そとを歩あるくことがきらいだから、夜よるになったら、空そらに出でる星ほしの数を数かずえてみれ。目めに見えるのだけ、いくつあるか、当あてたなら財産ざいさんを分わけてやる。」

父親ちちおやは、弟おとうとに向むかつて、

「おまえは、毎まい日にち、出歩でくことが好すきだから、この村むらはずれから十じ里りあちらの町まちに出で

まで、電信柱の数が幾本あるか、かぞえてみれ。それを当てたら財産を分けてやる。」

こう、二人にいいました。兄と弟は、たがいにこんなことはどうさもないことだと答えました。

弟は、すぐに出發しました。兄は、日の暮れるのを待つて、外の木の下に腰をかけた。そして、よく晴れた夜の空を仰ぎました。青い、青い、奥底から、一つ、一つの星の光が輝きはじめて、いつのまにか大空は、まいたように星がいっぱいになったのです。

兄は、一つ、二つと数えました。しまいには、指が疲れ、目が疲れましたけれど、我慢をして、「財産がもらえるのだ。」と思つて、かぞえました。すると、そのうちに雲が出てきて星の光を隠してしまいました。兄は、がっかりして、また明るく日の夜も、木の下にすわつて数えました。今度は、だいぶかぞえたかと思う時分に風が出てきて、木の葉をさらさらと鳴らしたので、ふとその方に氣を取られると、せつかく数えたのを忘れてしまいました。兄は、がっかりして、木の下に倒れて眠つてしまいました。朝になると、小鳥が木の枝に止まつて、「もう夜が明けた。とつくに日が上つた。」といつて、笑つてい

ました。

弟は、電信柱を一本ずつ数えてゆきました。はじめの間は広い街道を歩いてゆきますので、遊んでいるようでしたが、しまいには、田の中といわず、寂しい山の中といわず、とても歩いてゆけそうもないところに建っている、それを一つ一つ数えることは困難でありました。

「どうして、こんなところへ、だれが柱を建てたろう。」と、弟は、感心しながら、すぐごと家へ帰ってきました。すると、兄が、やはり星を数えることに絶望をして、ため息をもらしていました。二人は、父親の前に出ました。

「お父さん、目に見えることすら、こんなに知ることは困難なのです。これから心をあらためて勉強します。」といいました。こうして二人は、まことにいい息子たちとなりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「小学男生」

1921（大正10）年9月

※表題は底本では、「星《ほし》と柱《はしら》を数《かぞ》えたら」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星と柱を数えたら

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>